

家庭教育応援研修会

本研修会は、支援を必要とする家庭への支援についての理解を深め、日頃の実践に活かすことを目的に実施しました。当日は、管内の家庭教育支援に携わる関係者35名の参加者が、他の参加者と協議しながら学びを深めました。

<説明・交流>「本研修の趣旨説明」

筑豊教育事務所社会教育室 社会教育主事 綿引 直人

はじめに、アイスブレイクを行った後、福岡県及び筑豊地域の家庭教育の現状と県の家庭教育支援に関する方向性や取組について説明を行いました。その後、各自の学びたいことや明確にしたいことを書き出し、参加者同士で交流することで、本研修会における学びへの意欲付けを行いました。

<講話・演習>「支援を必要とする家庭への働きかけについて」

九州女子短期大学 子ども健康学科 宮嶋 晴子 氏

宮嶋氏からは、筑豊地域の現状を踏まえたうえで、支援を必要とする家庭への理解や支援者のあり方について、以下の重要な視点が示されました。



○家庭教育支援者のスタンスについて：

支援者は、保護者が安心と自信を獲得し、子育ての楽しさを実感できるよう、後方から支援する存在である。

○保護者の「学びの階段」について：

保護者が、学びの階段（①「家から一歩踏み出す」、②「人と語り合う」、③「地域とつながる」）を自ら登ることができるよう、支援者がしっかり伴走することが大切である。

○「見る・聴く・話す」の重要性について：

相手の様子を見て、すぐに伝えたいことを伝えるのではなく、保護者の気持ちを聴き、受け止めた上で、話すなど相互の信頼関係を構築することを意識して関わる大切である。

また、演習では、各職種の立場から直面している課題を共有し、現場での具体的なアプローチについて活発な意見交換が行われました。

講話・演習のまとめとして、まずは、保護者の生活基盤そのものを支え、安心感を与えることで「支援の土台」を作ることが重要であると教えていただきました。そして、この「支援の土台」を整えることが、結果としてその後のスムーズな支援につながるという視点を、参加者全員で深く共有しました。

参加者にとって本研修会は、参加者一人一人が支援を必要としている家庭への理解や支援者としてのあり方を深く見つめ直し、今後の活動に活かそうとする新たな心構えと意欲を高める、非常に有意義な時間となりました。

【参加者アンケートから】（抜粋）

- ・どんな保護者に対しても今一度リスペクトする姿勢や相手の気持ちを考えて接していく。自分が当たり前ではないことを忘れない。
- ・見る→聴く→話す、保護者の変化に気づいて声をかけたり、相手の話や悩みを聴くことから始めたりすることが大切なのだと改めて感じた。
- ・いろんな機関の方の話を聞くことができ、様々な立場から見える視点や支援の難しさを知ることができました。今後、様々な機関と連携しながら、支援をしていきたいと思いました。